
ドラえもんがない一週間～連載～

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもんがない一週間〜連載〜

【Nコード】

N2483E

【作者名】

春崎やよい

【あらすじ】

21世から離れたドラえもんは22世に戻ることになった。そこで、ドラえもんズのみんなにのび太を任せることにした。けれど、そのドラえもんズたちはどういうわけか、人型の姿に変わってしまった。一体誰が？予告通り、今日から連載始めます！

ドラえもんズとのび太

日本の隣には中国がある。そこにはドラえもんズのメンバー王ドラがいる。

今日も彼は、五十人以上の人と組み手をしている。

「あちよー！」

王ドラがカンフーで敵を倒していく。戦い終わり、一息ついていると・・王ドラの体に異変が現れた。ポンと音を立てて、王ドラの周りに煙が上がった。次の瞬間、王ドラは年頃の女の子の体に変わっていた。

「あれ？」

いつもの服に身を包んだ王ドラいつもより視野が高くなった。

体を見回し、人間の姿に変わっていることを確認した。

脚が長くなっていてから、これで苦手な脚蹴りを繰り出してみた。

すると、相手の顔に脚が届いた。

王ドラはそこに感動した。苦手な部分が出来て興奮しているといったほうが近い状態だ。

と、その時四次元袖に入っている親友テレカが光っているのを見た。王ドラはそれを取り出して見た。

誰かから連絡なのかを見ると、なんとドラえもんだった。王ドラはそれをタイムテレビに挿入した。

「ドラえもんなんですか？」

「実は一週間21世紀を離れるから、王ドラたちにのび太くんのことをお願いしようと思って・・お願いできる？」

「いいですよ。困ったときは、お互い様ですからね。」

「ありがとう！じゃあ、お昼くらいに来て」

ドラえもんがそっくり、向こうから切れた。

時は変わってアメリカ。

キッドのところにもドラえもんから連絡が来ていた。

王ドラと似たような会話を交わし、ドラえもんから切れた。ドラメツド、ドラリーニョ、ドラニコフ、マタドーラの所にも・・・

ドラえもんから連絡が来て、最初に行動を起こしたのが、キッド。

四次元ハットからタイムマシンを出し、日本に移動した。

ちょうど、のび太の部屋に到着したときには、ドラえもんがいなかったという所（短編をご覧下さい）に戻ると言うわけである。

のび太とあったのは、偶然であった。帰宅する時間とあったのは、奇跡的であるが・・・

小一時間ほど、のび太と話しているとチャイムが聞こえ、のび太が下に降りて行った。

下でのび太がはなしているのを聞いて、キッドが上にいることを忘れられそう、階段を下りてのび太たちの前に顔を出した。その時に見たのが、のび太の友達であってわけで紹介してくれた。

その時すでにドラメツドがタイムマシンから出てくるのを見た。ドラメツドだと分かったのは、ターバンをしていたから

そして、二階に上がってくるとマタドーラと王ドラがいたわけとなる。後から、ドラニコフについてくる形で、ドラリーニョが来たわけである。

「ドラえもん友達なんですよ？どうして、人間の姿になっているの？」

のび太が聞いてきた。

王ドラはなんていえばいいのか、考えています。

「えー・・・と、話すより見てもらったほうが早いので、これを見てください」

王ドラは、四次元袖からタイムテレビを出した。

ドラえもんのところに来る前に体に異変が起きたこと

それから後にドラえもんから連絡が来て、此処へ向かうことになったことも含み見せた

「へえ、そうだったんだ」

のび太は王ドラをまじまじと見つめた。そう、王ドラが女の子になったのが依然として謎なのだ。

男のはずなのに

「王ドラは男なんですよ？どうして女の子になったの？」

王ドラ以外のドラえもんズもずっと疑問に思っていたこと

「私にも分かりません。テレビにも映っていたでしょ？ドラえもんも私を見た時、全然驚いていませんでした」

そついえばそつだと、みんな頷いている。

「我輩が思うに・・・王ドラは、ドラえもんズのメンバーの中で女の子っぽい容姿だと思ってそつなつたのではないであるか」

ドラメツドが言うと、確かにとみんな頷いた。

「そんなことないです。」

王ドラはいまいにも鳴きそつな声で言った。

そつが女の子らしい一面なんじゃないかといいたくなくドラえもんズ。

そうして、ドラえもんズとのび太と一緒に暮らす一週間が始まったのであった

ドラえもんズとのび太（後書き）

今日から始まったドラえもんズ第二段！

短編と＋。これから頑張って更新していきますので、宜しく願
いしますね！

評価・感想・ダメだしお願いします！！

突然の留学生

今日は、月曜日。

のび太はいつも通り学校に登校した。いつもは、ドラえもんが起こしてくれるのだが、生憎ドラえもんは22世に帰っていていないのだ。

のび太は王ドラに起こされた。

「いつてきまゝす！」

いつもより早い登校は、のび太を元気にさせた。

学校に登校したのび太を見て、ジャイアンとスネ夫が珍しいと冷やかに来た。

「のび太が遅刻しないで学校にちゃんと来た！明日、雪が降るぞ！」

「煩いな。ドラえもんが起こしてくれたわけじゃないんだ。王ドラに起こされたんだよ」

「そういえば、そうだった。ねえ、のび太今日王ドラさんを誘って家に来いよ！面白いものがあるから、見せてあげたいんだ」

スネ夫が誘ってきた。

「いいけど・・・」

のび太は、返事をした。

「じゃあ、放課後すぐに家に来いよ！」

スネ夫はそう言って自分の席に戻っていった。

ちょうど、チャイムがなって先生が教室に入ってきた。

「えー、今日は留学生を紹介する」

扉が開き、留学生が入ってきた。緑の服を着た少年と橙色の髪をした少女が入ってきた。

のび太は、目を見開いた。

そう、留学生とは・・・

「中国から着ました。王ワンと言います。宜しく願いますね」

王ドラは笑顔で自己紹介をした。

そして、王ドラの隣で立ってヘディングしながら笑っている少年は、言うわなくてもお分かりであるドラリーニヨである。

「僕ドラリーニヨ。え・・と、ブラジルから着ました。よろしく、アミーゴ！」

元気あつてよろしいといいそうな顔をして、先生はドラリーニヨの横に立っている。

どうして、どういうわけでこの学校に・・・？

のび太は、知らん振りすることにした。けれど、ドラリーニヨはそれを許さなかった。

「あー、のび太だ！ヤッホー、のび太君」

ドラリーニヨがこっちに向かって手を振っている。のび太は、もうダメだ！と頭を抱えた。

「王ドラ、のび太がいるよ」

「そうですね。まさか、同じクラスだとは思いませんでした」

ああ、もう！これで、僕の楽しい生活ライフが・・・

のび太は、うな垂れた。力なく、笑っている。

静はそれを見て「大丈夫？」と声を掛けてきてくれた。

ありがとう、静ちゃん。

「そうそう、言い忘れていました。私たちは、今のび太さんの家にいます」

王ドラは、付け足してくれた。笑顔で・・・これで、王の魅力に落ちた生徒はたくさんいたという。

のび太は、もういいやと思った。そして、休み時間の間は・・・男子たちにしつこく質問をされた。

放課後、僕は王とドラリーニヨを連れて、帰宅した。

「ただいま」

今日は疲れた。スネオに誘われているけど、行くのも疲れた感じだ。「それにしても・・・なんで、君たちが学校に来るわけ？家で顔を合わせるだけでも、充分なのに・・・」

僕にとっては、この一週間がどんだけ苦痛になるのか、君たちは知らないからいいけど、僕にとっては迷惑な存在であった。

「私も良くわかりませんが、朝起きたときにドラえもんから連絡が着たんです。のび太くんの学校に編入手続きしておいたからって」
ドラえもんのせいか！？帰ってきたら、たっぷり苛めてあげるからね。

僕は、心の中でそう誓った。

チャイムの音が聞こえてきた。お母さんが出て、話しているみたいだ。

「のび太。遊びに来たぜ！」

げ！スネオだ。なんでよりに寄って、家に来るのさ！

僕はいやな顔をして玄関に向かった。

突然の留学生（後書き）

今回は、前回にひつ続き長いです。

この調子で書いていけたらいいです。

評価・感想 `welcamu` です。

訪問者

下に行ったきり戻ってこないのび太を見に行くことにした。

「のび太さ〜ん、どうしましたか？」

王ドラが玄関にいるのび太のところに行った。後からキッド・ドラメッド・ドラニコフ・ドラリーニョ・マタドーラと続いて降りてきた。

スネオがきていることに気づいたキッドは、上げれよと言った。

「お邪魔します〜す」

スネオは、家の上がりのび太についてきた。

のび太の部屋が窮屈になってしまい、とてもじゃないが座るところなんてないような状態になってしまった。

のび太はドラえもんから借りたスペアポケットから秘密基地という道具を出して、壁に貼り付けた。

「入って」

のび太はみんなに言った。

そして全員入ったのを見て、のび太も中に入って行った

中は広がった。

此処だったら、何人入っても窮屈になることにはならない。

「のび太さん、考え付きましたね。」

「まあね。前に一度、使ったことがあったからこれ使えるかもって」

此処ならいくら騒いでも煩くならないし、迷惑になりにくい

「スネオ、家に来ていたじゃない。どうしたのさ、急に」

「今日のび太学校で大変だっただろう？それを見かねて、こっちに着たんだ。どうせなら、ジャイアンも呼ぼうかかって思ったんだけど、家に手伝いで忙しいから言われたんだ」

「へえ、ジャイアンが・・・珍しいね。」

のび太は相槌した。

それにしても、家の手伝い・・・宅配とかだと思っけど・・・

途中でサボっているんじゃないかなとか思ったが、さすがにそんなことしないだろうなのび太は思った。

「で、何して遊ぼうか？」

「せっかく王ドラさんたちがいるんだし、話を聞こうよ。国のこととかいろいろ聞きたいし」

スネオがそういっているので、王ドラたちの国の話を聞くことになった。

始めは、王ドラから始まって、アラビア・スペイン・アメリカ・ロシア・ブラジルとなった。

どの話も興味深かった。

のび太にも分かるように丁寧に説明してくれたのだ。

それに水嫌い・水怖いのドラメッドが子供たちのためにウォーターランドを建設中だって事も聞けて、楽しかった。

話が終わり、みんな秘密基地から出てきた。出てきたときには、五時を回っていた。

スネオは、帰ることにした。

スネオが帰り際にのび太に「頑張れ」と言って帰っていった。

でも、スネオがなんで頑張れって言った意味が分からないでいた。

スネオがのび太に言いたかったことは、これから学校で起きることで頑張れといいたかったのだ。

のび太は、全然分らないでいた。

その日の夜の夕食はカレーだった。

一気に人数が増えたことにより、作る量も多くなったからという事だった。

訪問者（後書き）

大変遅くなり、すいませんでした。予定していたよりも遅くなってしまいました。

皆様お待たせしました。第三話投稿しました。
如何でしたか？

なるべく早く投稿しますので、読んでください！！
失礼しました。

それと、評価・ダメだし・感想など・ありましたら、お願いしま
すね

ギリギリセーフ！？

朝のび太は、王ドラとドラリーニヨと一緒に学校に登校してきた。ただ昨日と違って、今日は遅刻するところ。それは・・・朝のこと

「のび太さん、起きてください。ドラリーニヨも」

王ドラが寝ているのび太とドラリーニヨの布団を揺すっています。けれど、二人とも全然起きようとしません。

昨日はのび太さんだけ起こしていましたから、そんなに手強くなかったのに・・・今日は一段と眠りが深いです。一体どうしたらいいでしょうか？

王ドラが思考を張り巡らせて考えていたがいいのが浮かばず、とりあえず起こすことだけを考えました。王ドラは、キッドとドラメツドを呼びに下に行きました。

「キッド、ドラメツド協力してください」

王ドラは笑顔で二人に言いました。何だろうと思いつながら、黄土の後についてきた二人。

二人を連れて二階に戻ってきた王ドラは、のび太とドラリーニヨを起こしてもらったのです

王ドラは、二人に後を任せて下に行きました。

「のび太とドラリーニヨを起こせてか？しゃーなーな。ドラメツド行くぞ」

「分かったである」

王ドラが考えていたことがキッドに伝わり、二人を起こしに掛かります。キッドは空気砲を二人に向けて、撃ち始めます。

「始まったようですね」

王ドラはお茶をすすりながら、ゆったりとした口調で言った。のび太の部屋の下は、居間。ここでは、お茶を飲んでゆっくりしている王ドラと玉子がいます。

「キッド君は、一体何をしているのかしら？」

のび太の母親・玉子が首をかしげ、王ドラに聞いた。

「のび太さんとドラリーニヨを起こしてもらっているのです。なかなか起きてくれないので、キッドとドラメッドに任せました」

王ドラは玉子にサラッと凄いを言いました。玉子にしてみれば、空気砲を持ったキッドがわが息子のび太に発射している姿を見れば、殺してしまいかねない。

「のび太危ないじゃない！」

玉子はそう言っただけで居間から飛び出し、二階に駆け上がっていきました。

「心配することないのに・・・」

王ドラはそう言ってまた、お茶を一口喉に通した。

呑気なもんだ。一体何処からそんな自信が出てくるのだろうか？

「キッド何しているのさ？」

ガンガンと空気砲を打っているキッドを見た、ドラリーニヨは顔を青ざめてきた。

そりゃそうだ。ドラリーニヨとのび太に向かって発射しているのだから

「キッド、空気砲下げてよ！」

ドラリーニヨは、キッドを疑いの目で見ていた。それを聞いたキッドは、すぐに空気砲を下げた。

「さっさとおきりゃいいんだよ」

キッドはそう言って、空気砲を下げ、扉を開けた。そこに息を切らした玉子の姿がありました

「どうしたんですか？」

キッドは、玉子を見ながら言いました

「のび太は・・・？」

「起きていますよ。ドラリーニヨが起こしたようです」

キッドはそう言って下に降りようとしたが、玉子が許さなかった。

玉子はキッドの服の襟をつかんでいた。

「待ちなさい」

玉子は、キッドを部屋の中につれて入ってきた。

着替え途中だったのび太は、さっさと服を着て、玉子に怒られているキッドを見ていた。

「ねえ、ドラメツド。なんでキッドは、ママに怒られているの？」
状況を全く知らないのび太は、ドラメツドに聞いた。

「王ドラにのび太殿を起こして欲しいとお願いされたのである。」

「そうなんだ。じゃあ、なんでキッドは怒られているの？」

「それが・・・キッド、空気砲で起こそうと思って天井に向かって撃つたである。まあ、結局はドラリーニヨがおきて、キッドを止めたのである。」

「なるほど、そういうことなんだ。だから、キッドは怒られているんだ。」

のび太はゆっくりしながら、準備をしていた。ランドセルを背負い、ドラリーニヨと一緒に下に降りてきた。

居間で王ドラはお茶をすすりながら、座っている。

のび太とドラリーニヨはさっさと朝食を済まし、王ドラを呼びに居間に来た。

けれど、王ドラは座ったままコクリコクリと寝ています。

「王ドラ起きてよー。学校に行くよ」

いくら呼びかけても、王ドラは起きようとしません。むっとしたのび太は、ドラメツドを呼んだ。

「どうしたであるか？」

「王ドラが起きないんだ。起こしてよ」

「任せろ」

そこにマタドローラが入ってきました。マタドローラに王ドラを起こすことが出来るのであろうか？

マタドローラは王ドラの体を寝かせ、手で髪をすいた。王ドラの髪の毛は、サラサラしていて気持ちいい。

「可愛いな」

そして、王ドラの形いい唇に唇を重ねようと思いました。

そこまで言えばわかるだろうか？そう、マタドローラは王ドラの寝込みを襲うとしているのだ。けれど、それはうまくいかず。王ドラは目を覚ました。

「何をしようとしているのですか？マタドローラ」

「何って・・・王ドラとの仲を深めようと思って」
「そうですね」

王ドラは笑い、マタドローのお腹に膝蹴りをお見舞いしたのであった。

マタドロー撃沈。ご愁傷様・・・

マタドローは、お腹を抱えて悶絶している。

「さて、馬鹿はほうっておきましょう。のび太さん、ドラリーニヨ学校に行きますよ」

時計を見れば、8時10分。

「走って学校に行けば、まだ間に合います！」

王ドラは玄関に行き、靴を履き扉を抜けて走り出した。そのあとにドラリーニヨがのび太の手をとって走っていった。

そんなわけで急いで学校に来たのび太とドラリーニヨ、王ドラであった。

「ギリギリですう。次から、二人とも早く起きてくださいね」
王ドラてめえもだー！

のび太、ドラリーニヨが王ドラに突っ込みたくなった。

茶あ飲んでいてゆっくりしていて、寝ていたじゃんかー！！
突っ込むのを忘れて、三人は教室に向かって歩いてきた。

「おはよう、のび太」

スネオがのび太の所に来た。

「おはよう」

机の横にランドセルを置いて、座った。

「王ドラ、おはよう」

「おはようございます。スネオさん」

挨拶されただけでスネオは顔を赤くした。

「席に着けー」

先生が教室に入ってきたから、みんな席に着いた。

ギリギリセーフ!? (後書き)

本日二回目の更新です。まさか、今日二回も更新できるとは思いませんでした。

実はこれ、普段遅刻しているのび太の設定に二人を巻き込みたくなつたので、書いてみました。これもありなのか?と。

たくさんのお評価待っていますので、宜しくお願いしますね。

ジエドロー登場！講師がやってきた

学校にギリギリセーフで登校してきたのび太・王・ドラリーニヨ。

一時間目の授業を難くこなした。一時間目・二時間目が終わり、三時間目の体育の時間となりました。着替えて、体育館に集合となりました

王ドラとのび太、ドラリーニヨ三人一緒に体育館に移動してきました。

「今日は、何をやるんでしょうか？」

開口一番に王ドラが聞いてきた。

「体育館に集まったってことは、マットか跳び箱かな？」

のび太が自信なさげに言いました。

出来れば、やりたくないなあ

なんてことを考えていた。

のび太は、体育が苦手。だから、早く体育の授業が早く終わって欲しい。

「体育の授業は私ではなく、体育の講師の先生がやることになった」
講師の先生。一体誰だろうとみんなは、ワクワクしている。

のび太たちの前に現れたのは、よく知っている人物。なんと。それはキッド。

のび太は啞然として言葉を無くした。

「体育の講師をやることになったドラ・ザ・キッド。キッドって呼んでくれ！よろしくな」

キッドが体育の講師？

のび太は、叫ばずにいられなくなり、言いました。

「キッド！？どうして、此処に・・・？」

「そっか。のび太知らないんだっただな。ドラえもんがかつてにやつたらしいんだ。さつき、連絡が来てそういつていた。」

ドラえもんの仕事かー！！怒りたいのを抑えながら、再度聞いた。

「そうなんだ。じゃあ、みんなも？」

「いや、全員じゃねえよ。マタドーラとドラニコフは、家にいる。

ああ、そうそう。ドラえもんから聞いた話じゃ、ドラパンも此処に来るらしいぜ？」

なんだってー！！

のび太は、口をパクパクと動かした。言葉が出てこない。

あまりの凄さに言葉も失った。いや、ショックが大きすぎたのかも
しれない。

ちよっと、待った。ドラメッドは、此処にいるってことだよな？
一体何の授業を？

「ねえ、キッド。ドラメッドもいるんだよね？一体何の授業なの？」
のび太は、疑問に思ったことを直接キッドに聞いてみました。

「あとで分かる！」

どういうことだ？のび太は、今日の時間割を鮮明に思い出そうとし

た。

この後、四時間目は、国語で、そのあとが音楽・・・待てよ？ドラメツドの得意とする分野は、音楽だ。ってことは・・・もしま、音楽の講師！？声にならない声をあげた。

「のび太さん、大丈夫ですか？！」

王ドラが心配そうな声を掛けてくれました。今は、一人になりたい気分。けれど、今は体育の時間だから、無理だけど・・・それにしても・・・ドラえもん心配し過ぎだって！一週間家にいだけで、こんな事しなくても

帰ってきたら、これ以上のことしてやると思ったのび太でした

「のび太？授業始めるぞ？」

へんな意気込みをしているのび太にキッドは、授業を始めていいか聞きました。

「うん、やろつよ。早く」

のび太は、目が笑っていない笑顔をキッドに向けました。

それを見たキッドとクラスメイトは、のび太から黒いオーラを感じました。

のび太怖さんいっ

先生までも怯みました。そうして、体育の授業が始まりました。

体育の授業は、跳び箱。四段から六段まで飛びました。

時間が余ってしまったため、そのあとは自由となりました。

中には、ボールを出して、キャッチボールをしている人・バレーボールをしている人がいました。

けれど、のび太・ドラリーニョ・王は、スネオとジャイアン・静と一緒にキッドを話をしていました。

「どういつつもりなの？ドラえもんは。君たちを学校に送り込んでドラえもんズだけじゃなくて、ドラパンも送り込もうなんて」

のび太は、怒っています。

さつきから機嫌が悪かったのって、怒っていたからなんです。納得してしまっ、ドラリーニョ・キッド・王・静・ジャイアン・スネオであった。

「私ずっと疑問に思っていました。人間になったときから感じていたんですが、すべてドラえもんの仕業じゃないんでしょうか？」

「そういえば、そうだな。一週間家にいないだけで、俺たちを呼び出した。ドラえもんが何を考えているのか分からねえが、このままだとやばい気がする。」

「私もそう思います。」

王ドラが頷きました。

沈黙・・・

相変わらず、ドラリーニョはヘディングしていて、考えてなさそう。「王ドラ、キッド、ドラリーニョ。此处、のび太さんが通っている学校でいいんですよね？」

いきなり現れた人。ドラえもんズと違って頭には、三色のついた帽子を被っている。特徴的な服を着ている。

「ジェドローラ！どうして、あなたが此処にいるんですか?!」

王ドラが言いました。

「知り合いなの？」

「ええ、そうです。私たちと同じ学校を卒業したジェドローラです。」
「始めまして。君がのび太君だね。よろしく」

「こちらこそ。ドラえもんに言われてきたんだね？」

「そうです。のび太君のことが心配だから、行ってくれって言われて。あ、それと。この学校で家庭科の講師をすることになりました」
ドラえもん、覚悟してね。

また、のび太から黒いオーラが出ていました。

「ドラえもん帰ってきたら、やばいですよね？キッド」

「ああ、そうだな」

王ドラとキッドは、のび太を見ながら言いました。今ののび太は、危険だ！

そうして、体育の時間は終わりました。

ジェドローラとキッドは、職員室に戻り、のび太たちは着替えるため教室に戻ってきました。

四時間目の授業が終わり、給食になった。

いつもと味が違う。作っている人が違うのかな？

「ねえ、王ドラ。味違うね」

「そうですね。こんな変わるものでしょうか？」

最近食べた王ドラにも昨日、今日食べた給食の味が違うことに気がついたようだ。周りを見渡せば、他の生徒たちも気がついていようです。

「どこかで覚えているんです。この味つけ」

「そりゃそうだよ。なんせ、この僕が味付けしたんだから」

教室にジエドローラが入ってきました

「やっぱり、ジエドローラでしたか。覚えがあると思いましたよ」

そっか。だから、違ったんだ。のび太たちは、納得したという顔つきに変わりました。突然入ってきたジエドローラにクラスは驚いていきます。

「ジエドローラってお菓子だけじゃなく、料理のほうも出来るんですね。」

王ドラは感心していた。

お菓子？ジエドローラってお菓子作るのが得意なんだ。初めて知った。

「ジエドローラ、今度家に来ない？」

「行くも何も、のび太さんの家でお世話になりますから」

「そっか。」

ドラえもんの友達は、僕の家に来ることになっているんだもんね。楽しい給食の時間はあつという間に過ぎていきました。

この後は、ドラメツドの音楽だけ。

休み時間の間に音楽室に向かいました。

案の定、そこで準備をしているドラメツドの姿がありました。

「ドラメツド、キッドから聞いたよ。君も此処で、音楽の講師をやることになったんだってね」

「そうなのである。」

ドラメツドは、準備しながら応えてくれた。奥から、がさごそと音が聞こえる。誰かいるのかな？

準備室に目を向けると、そこには見覚えのある後姿があります。

「ドラニコフ？」

その人は、ビクツと肩を揺らしました。

そっか、ドラニコフだったんだ。体育の授業のときにキッドが言っていたことを思い出しました。

『マタドーラとドラニコフは、家にいるよ』

キッド、ドラニコフは学校にいるじゃないか！！まあ、ドラメツドの手伝いで此処に着たんだろうけど

のび太は、苦笑した。家にいても、することがなくてドラメツドについてきたドラニコフ。似合っているなと

「ドラニコフは、ドラメツドの手伝い？」

「そうだよ」

初めてドラニコフの声を聞きました。喋ったことがなかったから、新鮮な感じがしました。

音楽の授業が始まるまで、ドラニコフと喋っていました。

楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。

ジエドーラ登場！講師がやってきた（後書き）

暫くお休みいたします。来週テストがありますので！

次回投稿は暫く掛かる模様。読者の皆様には、大変申し訳なく思います。三週間後には、きちんと戻ってきますので、すいません！

以上です。

それと、評価待っていますので、宜しくお願ひしますね。

ドラパン登場！ドラえもん発見！？（前書き）

王ドラキャラ変わります。けれど、腹黒

ドラパン登場！ドラえもん発見！？

六時間目の授業も終わり後は、帰宅だけとなったのび太・ドラリーニヨ・王ドラ。

けれど、ドラニコフ・ドラメッドとキッド・ジエドーラを待つため、教室で三人仲良く残っていた。

最初は、ジャイアン・静・スネオもいたのだが、そろそろ帰らないといけないからと三人は帰っていた。

そろそろ、五時になるから王ドラに校門で待っていてよという事になり、学校から出た。

五時半に四人が出てきた。

「来たよ」

のび太が王ドラとドラリーニヨに言った。

王ドラは、読んでいた本をしまい、ドラリーニヨは、ヘディングをしていた。相変わらずだ

「待たせてごめん。さ、行こうぜ！」

王ドラは、誰もいないのを確認すると四次元ポケットからどこでもドアを取り出した。

「のび太さんから入ってください。」

最後に王ドラが入ると、ドアは消えた。

家の玄関に出て、靴を脱ぎ、階段を上がり二階にある自分の部屋に帰って来た。

マタドローは、シエスタしていた。

結局、マタドロー以外のドラズメンバーは、学校に来ることになってしまった。

最初のうちは、王ドラ・ドラリーニヨとはじまり、次に体育の講師としてキッド、音楽の講師ドラメッドその助手ドラニコフ、家庭科の講師でジエドローと来た。終いには、ドラパンも何かの講師でやってくると来たものだ。のび太にとっては、いやな一週間になるに違いなかった。

「全くドラえもんは・・・何考えているんだろう？僕をこんなにして困らせたいのかな」

のび太はイラついたようすで言った。

それになんて応えていいのか、分からないドラえもんズ（マタドローを除く）は思っているのである。

「そうですね。のび太君が心配なのは分かりますがいくらなんでもこれは、やりすぎですよ。ドラメッドもそう思いますでしょ？」

「我輩もドラえもんのやるのが正しいとは思えないである。今回は、ドラえもんが悪いであるな。」

「僕もそう思うよ。一体ドラえもんは、二十二世で何をやっているんだろうね？」

ドラリーニヨが言ったことで、みんないつせいにドラリーニヨを見た。そして、のび太は押入れを開けて何かを取り出している。

「あつた」

のび太が手にしていたのは、ドラえもんのスペアポケット。のび太

が考えていることは、他のみんなにも分かったようだ。何をしているドラえもんをタイムテレビに映し出して何をやっているのか、見る。

「のび太、やろう！ドラえもんが何をしているのか、突き止めるんだ！」

「うん！！」

のび太は、にやりと笑いながら、キッドを見て頷いた。

タイムテレビを取り出し、ドラえもんの様子を映し出した。

ドラえもんを見つけた！！何か見えているようだ。テレビを移してみると、そこにのび太たちの姿が映し出されていた！

「ドラえもんを呼び出しましょう！」

王ドラは、友情テレかを取り出し、タイムテレビにセットした。そこにドラえもんの顔が映った。

「ドラえもん、私たちをずっと監視していたのですか？」

「監視っていうか、観察かな？校長先生に頼まれたんだ。のび太くんをお世話する君たちの様子を見てくれて！」

「じゃあ、私をこの姿にしたのは、ドラえもんあなたなんですね？」

「！」

「そう ごめんね。」

ドラえもんはそう言って切った。

王ドラの肩が小刻みに揺れている。そうとう怒っているなどのび太は思った。

「ドラえもんにお仕置きが必要ですね」

みんなに聞こえないくらいの声でボソツと呟いた。

「此処はどこだ？のび太の家はこの辺だとドラえもんから聞いたが・
・・」

ドラパンは、迷子になっていた。怪盗なのに方向音痴なんて・
今、スネオの家の前にドラパンはいる。

「誰かに聞くか」

ドラパンは目の前にある家のチャイムを鳴らした。

『どなたですか？』

スネオが出てきた。

「聞きたいことがある。野比のび太の家はどういったらいい？」

「案内します！」

スネオは、ドラパンをのび太の家に連れて行くことになった。

気分ルルン！また、王ドラに会えるんだから嬉しいことほかない。
のび太の家に行く足取りは、軽いもの。

それにしても・・・

スネオは、ドラパンを見た。

美人な男性がどうして、尋ねてきたのだろうか？しかも、のび太の
家を

スネオは、疑問に思った。

「あの・・・のび太の知り合いなんですか？」

「のび太というより、ドラえもんの知り合いだ。」

「そうなんですか」

ドラえもんの知り合いか・・・ということは、この人もロボットな
んだろうか？

のび太の家の前にきたスネオとドラパン。

「僕は、これで失礼します」

スネオは、ドラパンにいい早足で家に帰っていった。こんな時間に
なんのよう？と聞かれたら気まずいし、やっぱり帰ることにした。

ドラパンは、野比家のチャイムを鳴らした。
ピンポーン！

母親は、父親と一緒に出かけかけていて家にいない。二階からのび太が
着て、玄関を開けた。

「……えつと。ドラパン？」

「そうだ、私だ」

しばし沈黙。どうすればいいのだろうかとのび太は、焦っている。
上から誰かが降りてきた。

「のび太どうした？」

キッドだ。

そういえば、ドラえもんが言っていたな。ドラえもんズもいるから
と。まあ、当然だな

「入れてくれないか？」

「あ、そうだね！」

のび太は慌ててドラパンを中に入れた
キッドは俺を見て固まっていた。

「どうした？」

「本当にドラパンなのか？」

「そうだが・・・」

眉を中心に寄せた。

上からドンドン降りてきた。王ドラを見たときびっくりした。

「王ドラなのか？」

「ええ、そうですけど」

ドラパンは、王ドラのカッコウを見て驚いた。だって、王ドラの格好。スカートを履いている！！それに可愛いブラウスを着て、これまた髪型を上でポニーテールにしているバレッタがハート。

だから、ドラパンが驚くのも無理はないと思う。

どこからどう見ても女の子しか見えない

「王ドラ・・・お前のその格好どうにかならないのか？」

「私の格好がどうかしましたか？」

みんなの視線が王ドラに集まった。それを見て、みんなビツクとなった。

「可愛い〜」

ドラリーニョが王ドラに言った。王ドラも満更ではない顔をしている。

「ドラリーニョ、どうですか？」

「うん、凄く似合うよ〜。王、どこからどう見ても女の子みたい〜」

「ありがとうございます」

今、王ドラ。ありがとうございますって言ったのか？

ドラパンは目眩を覚えた。

「王ドラ、女の子の体に性転換するか？」

「しません。ドラえもんが私の体を女の子にしてくれましたから、楽しもうと思ってます」

なんだ、そういうことか。

みんなは納得した

王ドラが女の子になってしまったら、みんなびっくりするだろう。

けれど、本人はドラえもんに感謝慣例の言葉を言っている。

「上に行きませんか？」

「そっだね」

のび太たちは、上に上がっていった。

ドラパン登場！ドラえもん発見！？（後書き）

三週間休みといたしましたけど、痺れを切らしました！

ごめんなさい。けれど、これからはなるべく投稿いたします！読者の皆様、待たせてしまいすいません！

評価・感想お願いします

とつとつ全員集合だ！始まった学園生活！！

二階に上がったドラえもんズとドラパン。

ドラパンは、さっきから王ドラの格好に目が釘付けになっている。

(なんで、王ドラはあんな格好をしているのだ?)

考えても分からないことばかり。

王ドラはマタドローを起こして、マタドローに捕まっている状態。捕まっているというより、擦り寄られているといったほうが適確なのかもしれない。

「マタドロー！やめてください！怒りますよ！！」

「そんな格好をしている王ドラもどうかと思うけどな」

言われて見れば、確かにそうかもしれないと思う一同。いくら女の子の姿だからって、スカート履いている時点でアウトだろう。

「とりあえず・・・マタドローを王ドラから引き剥がそう」

ドラリーニョが的射ることを言った。そうだなとみんなは首を縦に振り、マタドローを王ドラから引き剥がす行動に出た。

引き剥がすこと十分経過・・・

やっとの思いでマタドローを王ドラから引き剥がすことに成功した。「で？どうして、ドラパンは美青年の格好なんだ？親父でもいいと思うがな」

マタドローは、白い目でドラパンを見ている。

そりゃ、そうだ。誰でも、ドラパンは年を取っているおじさんだと思っただろう。けれど、実際。

ドラえもんがドラパンを人間にするとき、美青年の感じのいいお兄さんになった。それは、もう。のび太を護るためだったら年のことなんて気にしないといったことだろうな。

「ドラパンも僕の学校で何かの講師をするんでしょ？何をするのがのび太は、もう諦めたといった感じで聞いてみた。すると

「フランス語の講師をやることになった。それと・・・マタドロー。

お前も学校に来ることになったからな」

「え、俺も？」

「そうだ。」

「一体何をやるんだよ？」

「マナーだ。アメリカのマナー教室をやることになったらしい」

「はあああああ！！！俺がやるのかよ？」

「お前しかいないだろう。みんな、学校に来ているんだ。それくらいやっても可笑しくないだろう」

「そうだけだよ……。」

マタドローは、小さい声でぶつくさ言っているが、何を言っているのかは聞き取れなかった。

朝、王ドラとドラリーニョと一緒に学校に登校した。今日も大変な

一日になりそうだ。

これから、毎時間授業の内容ががらりと変わる。先生から聞いた話だと・・

一時間目 体育の授業

二時間目 音楽の授業

三時間目 英語の授業

四時間目 アメリカのマナーの授業

昼休みを挟み、五時間目から国語、算数となった。午後は、普通の授業をやるらしいが、午前中は講師の先生の授業をやることになりました。

キッドは、体育の授業から英語の講師の先生をやることになり、体育の講師のところからドラリーニヨが入ることになりました。

生徒であったドラリーニヨは、生徒から講師の先生に階級が上がることに

キッドの英語の授業は、わかりやすく楽しい授業。王ドラも凄く楽しそうに受けていました。

マタドローラのマナー教室は、初日なのに上手に教えてくれた。実践ありだそうだ。話を聞くんじゃないかと、やるのが大切だとかで・・・そうして、一日は終わったのであった。

とうとう全員集合だ！始まった学園生活！！（後書き）

ドラパンも登場し、話も中盤に差し掛かってきました！！アンケートをとりたと思います！！

最後、ドラえもんはのび太に酷い仕打ちをされるのですが、どのようになりたいですか？聞かせてください！！お願いします！！

評価・感想・ダメだしお願いします！！

帰ってきたドラえもん！

朝、のび太を始め、王ドラ、ドラリーニヨ、マタドローラ、ドラメツド、ドラニコフ、キッド、ドラパン、ジエドローラとみんな学校に行きました。

今日の授業は、マナー教室・英語・フランス語・体育となっています。音楽・家庭科は別のクラスで行われるのです。

学校に登校してきたのび太と王ドラは、急いで教室に入ってきました。

「おはようー！」

「おはようございますー！」

隣同士の席に座ります。先生が教室に入ってきました。

「おはよう。今日は、フランス語の授業があります。副担任の先生をみんなに紹介しようと思う」

クラスは、ざわめきます。のび太も一体誰なのだろうと興味を持っています。

教室の扉が開かれ、先生が入ってきました。

教室の中央に来てみんなのほうに向きました。のび太は、顔を見ると強張らせました。

副担任の正体・・・それは、なんとあのドラえもんだったのです！

「ドラえもんンンンンン！！なんで、ドラえもんなの？！つうか、いつ帰って来たんだよ！？」

みんなの前という事を忘れて、のび太は、叫びました。

「のび太くん、久しぶりだね もう、四日も経つんだね。」

ドラえもんは、悪気もなしにのび太に言います。けれど、のび太は、聞く耳を持つとしません

「僕、寂しくて帰って来たんだ。昨日のうちに此処の学校に来ることにしたんだ。よろしくね」

のび太は、ドラえもんに近づきます。両手をドラえもんの首に掛け

ました。

ドラえもんの首を絞めていきます。

ギギギ！

「のび太くん……………苦しい……………よ…。何……………している……………の……………？」

「首を絞めているんだよ 僕に謝らない限り、止めないから」

のび太は、笑って言います。けれど、目が笑っていません
バツクには黒いオーラを纏っています。今ののび太は、ドラえもん
を殺そうとしています。

王ドラが止めに入ろうとしますが、のび太が跳ね飛ばしました。

「王ドラさん大丈夫？」

静が駆け寄ってきました。王ドラを抱き起こしました。

「大丈夫です。それより、のび太さんを止めないと」

のび太に近寄りますが、またのび太に跳ね飛ばされてしまいました。
「くう……」

ドンドン、ドラえもんの顔が青くなっていきます。このままだと窒
息死してしまいます。

のび太の手は、緩めることをしません。本当にドラえもんは、死ん
でしまいます。

「なんとかしないと」

王ドラは、静に支えてもらいながら、立ち上がりました。ジャイア
ン・スネオに視線を向けました。

二人は、王ドラが何を言いたいのか伝わり立ち上がりました。そし
て、のび太に寄って行きます。

「のび太そのくらいにして置けよ」

ジャイアンののび太をドラえもんから引き剥がしました。倒れない
ようにスネオがのび太を受け止めました。

「ドラえもんが悪いんだ。僕を信用しないから」

のび太の目には、薄らと涙が浮かんでいます。

「普段ののび太を見ていたから、不安だったんだよ。」

ジャイアンののび太を見つめて言います。

「だったら、他の方法があるじゃないか！」

のび太がはき捨てました。そう言っつて、教室から飛び出しました。クラスメイトは、啞然とするばかり

ドラえもんは、僕のことを信用していないんだ！だから、タイムテレビで僕を見ていたんだ！

のび太は、走つて校舎を出ました。校庭に座り込みました。

途中で、のび太を見かけたマタドローラは、のび太を追ってきました。

「のび太ー！」

のび太は、振り返りました。こっちに手を振つてやってくる人物は、マタドローラです。

「マタドローラ」

マタドローラは、のび太の隣に来ると座り込みました。

「一体どうしたんだよ？」

マタドローラは、のび太に聞いてきます。のび太は、俯きました。

「ドラえもんが着たんだ」

「ああ、そつだな」

「マタドローラ知っていたの？」

「朝、職員室に挨拶にしに着たんだ。」

「そっか」

のび太は、マタドローラから視線を逸らしました。そして、校庭を見つめました。

沈黙すること、五分。マタドローラが話しました。

「ドラえもんがこっちにきたのって、いい加減な気持ちじゃないと思うぜ。ドラえもんなりにのび太のこと考えてくれているんだよ。だからだと思っぜ？のび太も少しは、ドラえもんのこと考えたらどうだ？」

マタドローラが正しいことを言いました。

確かにそうかもしれない。僕は、いつもドラえもんに頼ってばかりだ。いつつドラえもんを当てにしているから

のび太は、立ち上がりました。

「マタドローラの言うとおりだよ。僕、ドラえもん甘えていたんだ。

これからは、自分のことは、自分でやるよ」

のび太は、笑って言いました。

「約束だ！」

マタドローラは、立ち上がりのび太を見つめました。

「のび太くん！」

ドラえもん和王ドラがのび太を追いかけました。

ドラえもんは、のび太の所に来るなり、開口一番に「ごめんね！」と謝りました。

「僕、やりすぎたよ！王ドラたちをのび太くんの所に向かわせて、終いには学校に送り込んだりして・・・」

「もう、いいよドラえもん。ドラえもんが僕のことを心配してやったことなんだから。僕は、お礼を言わないといけないよ！」

のび太は、優しく言いました。ドラえもんを見て、微笑んでいます。

「のび太くん・・・」

ドラえもんの目には、涙が薄らと浮かんでいます。

「マタドロー、邪魔しちゃ悪いですから行きましょう」

「そうだな」

王ドラとマタドローは、のび太とドラえもんを残してその場から去りました。

のび太とドラえもんは、見つめあったまま動きません。まるで、二人の世界が時間が止ったように

「ねえ、ドラえもん。僕のこと、どう思っているの？」

「好きだよ、のび太くん」

ドラえもんは、のび太を抱き寄せました。ドラえもんと のび太の距離がさらに縮まりました。

顔が近くなり、唇が触れてしまいそうな

とつてもいい雰囲気です。そして、キスしようという位置に来ました。その時・・・

「おーい！ドラえもん」

キッドが着ました。二人は、慌てて離れました。

ちっ、いい雰囲気だったのにキッドのせいでキスできなかったじゃないですか！？

王ドラが腹の中で思うのでした。王ドラとマタドローは、校舎の影から見ていたのです。

ドラえもん、のび太、王ドラ、マタドローラは、教室に入ってきました。授業はすでに始まっています。しかも、マナー教室です。マタドローラの授業。生徒は、今か今かとずっと予習をして待っていました。

マタドローラがきたことで授業がやっと始まります。

「遅れてすまないな。これから、授業を始める。ドラえもん、手伝ってくれ」

ドラえもんは、首を縦に振りませんでした。

授業は順調に進んで行きました。

マナー教室の授業が終わった休み時間。のび太は、スネオとジャイアンに質問され続けていられました。

「のび太、教室飛び出して行った後、王ドラとドラえもんがのび太を探しに行ったけど、どうなったんだ？」

のび太は、この二人にはきちんと話しておこうと思いました。

「ちゃんと、仲直りできたよ。」

「そうか、良かったな」

ジャイアンは、良かった良かったと何度も行っていました。

ドラえもんがいない一週間は、こつして幕を閉じたのでした。

帰ってきたドラえもん！（後書き）

これにて、ドラえもんがない一週間（連載）は、終わりです。自己満足という形で終わりになってしまいました。けれど、私なりにこれでよかったと思っています。ドラえもん、一週間持たなかったなど。のび太が大好きなドラえもんでした。（落ちが足りなかったかな？）

それでは、これで失礼いたします。読んでくれた皆様、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2483e/>

ドラえもんがない一週間～連載～

2010年10月9日02時01分発行